報　　告

中川幸庵の生涯と肺吸虫研究

中川　秀幸

目　　次

1. はじめに
2. 生いたちから渡台まで
・生いたち
・宮城県の寒村での開業
蝶の採集など
3. 渡　台
・日露戦争最中の渡台
・花連港医院長として
・マラリア・黒水熱、そしてキニーネ
4. 肺吸虫研究
・肺吸虫流行地新竹医院長に就任
・肺吸虫の第2中間宿主を求めて
・奥地山岳の高砂族
・カラパイ、赤いカニとの出会い
－大正三年七月－
・「赤いカニの幻想」－大正三年九月22日－
・夏の蕃山は静かである
5. 台中から内地へ
・肥大吸虫の中間宿主、ヒラマキガイの発見
・「紅涙記」
・故郷での診療活動
・森下薫博士はじめ、諸先生の御厚情

1. はじめに

先年（昭和52年10月）第33回日本寄生虫学会西日本支部並びに第32回日本衛生動物学会西日本支部合同大会が金沢大学医学部において開催された折に吉村裕之大会長（当時金沢大学教授）から特別講演として金沢大学医学部の先輩に当る父のことについて話をするよう依頼された。私はこの様な大会での講演は荷が重く適任ではないと考え御辞退申上げたが吉村先生の熱心なおすすめにより,「父幸庵の歩いた道」と題し講演を行った。その折に座長をおつとめ頂いた阪大名誉教授森下薫先生から，今の話の内容を何かの雑誌に載せて発表しておくようにとのお奨めがあったがついそのままになっていた。森下先生も他界された今日ではあるが本誌を借りてその内容をもとに記することにした次第である。またこの大会を機会に父の学術遺品などの特別展示が催され，その後肺吸虫研究を主としたこれら遺品が父ゆかりの金沢大学で保存されることになったことは私たち遺族にとってこの上ない喜びである。あらためて吉村先生，故森下先生，九大名誉教授宮崎一郎先生はじめ関係の方がたに心から感謝申し上げる次第である。

父の生涯のなかで最も心血を注いだのは勿論肺吸虫の発育史の究明であった。そして幾多の艱難辛苦の末，遂に肺吸虫の中間宿生が全く予想外の淡水に住むカニであることを発見することができたのであり，この発見にまつわるエピソードについては父自身晩年に手記を書いており，また森下先生，目黒寄生虫館長亀谷了先生，佐々学先生，吉村先生によって紹介されているところである。

2. 生いたちから、渡台まで

生いたち

父は医師中川良節の4男として明治7年7

月13日に越中国砺波郡竹内（現富山県福光町）に生れた。男の兄弟は４人であったが医師になったのは家督を継いだ長男と末子である父だけであった。祖父良節は金沢へ出て加賀藩の医師中野良庵に医術を学び郷里で開業，藩から槍一本と寛裕堂の称号を給わったと伝えられている。父は明治21年３月に福光高等小学校を卒業後直ちに勉学のため金沢へ行き第四高等中学医学部医学科へ入学，27年11月同校を卒業しているので20歳で医師になったわけである。ちなみに医籍登録番号は7934号であった。在学中は特待生であったことが父の記録にみえている。

父の履歴をみると明治28年母校の副手を経て月給金10円で石川県立金沢病院に勤務，その後30年７月から36年７月まで６年間東京の内務省立永楽病院勤務となり37年８月台湾に渡るとある間約１年１ヵ月のブランクがある。この間が父の一生を左右する岐路となった重要な時期であったと私には思えるのである。

宮城県の一寒村での開業

父は先に東京において私の母である広尾と結婚しており長男をもうけていたのであるが，実は36年８月に知人のすすめにより宮城県本吉郡唐桑村で開業していたのである。ここで亡き母のことにふれると母は加賀藩士萩家の出で現在父母兄弟の眠る通称赤門寺と呼ばれる日蓮宗全性寺は母方萩家の菩提寺である。

父の関業した高桑は地図でみると岩手県境に近い気仙沼近くで現在では可なりの町になっているようだが当時は小さな漁村であったように思われる。ここで開業することになったのは前述のように知人の医師のすすめによるものであるが知人が開業していた頃は豊漁が続き可なり裕福な村であったようである。ところが父が期待をもって開業した時期は不漁続きで貧窮のどん底で村人は医療費を支払うことができず，代りに魚を持ってくる有様でいつも軒先に魚がたくさんぶら下っていたものだったと母が話していたのを記憶している。そして遂に薬屋への支払もできなくなり８ヶ月の悪戦苦闘の末，家をたたみ東京へ帰ったのである。離村に際して当時はこの辺までは鉄道が開通していなかったため船便を利用したのであるが村民総出で見送り浜辺に座って泣きながら別れを惜んだということで，「後髪を引かれる思いだった」と折にふれ母が述懐していた。

もしこの開業が成功していたら父の人生は違った方向へ進んでいたものと考えられる。おそらく地方の一開業医として一生を終っていたであろう。この失敗が台湾へ渡る動機となったと推察され父の人生航路を大きく変えたものと思われる。

蝶の採集など

父は蝶の採集に趣味をもっており台湾で自ら採集した標本が現在私の手許にありよい記念になっているが、唐桑村のことで直接父から聞いたことは附近の野原にヒョウモンチョウ類が頗る多かったということだけであった。この時期既に蝶に興味を持っていたことがうかがわれるが，こういった生物に対する興味と関心があるいは後年の寄生虫の研究に何らかの影響を及していたものであろう。

私も父の感化で子供の頃から昆虫に興味を持ち現在でもあきもせずに昆虫採集を続けているが、昆虫を通じての父の思い出も多い。そこで余談ではあるが、ここにその一端をのべることにする。私が生れたのは父の台中医院長時代だったので私の５、６歳の頃には父に台中郊外の陸軍墓地附近へ蝶の採集につれていってもらったものである。そこのタイワンレンギョウの紫の花に多くのマダラチョウやシロチョウ類が集まり、乱舞している情景が今でも目にうかぶ。捕虫網の使い方のテクニックなどは、その頃父に手をとって教えてもらったものである。

何しろ、台湾は蝶の宝庫といわれるところ

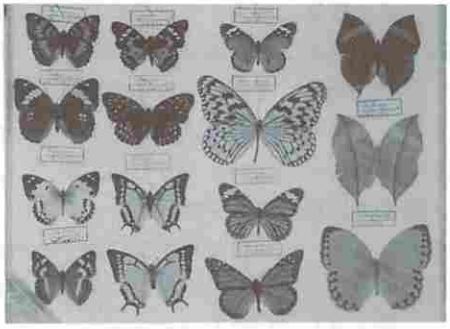
なので、ここでの各種の美しい蝶との出合いは父を驚喜させたに違いない。そして肺吸虫の研究の苦闘の中で、父にとって昆虫採集は、心のやすらぎであったように私には思えるのである。

ワモンチョウの標本を見ていると「山地の竹林の中の竹の切り株に溜った水を吸いに10数頭も集っているのをよく見かけたものだが、網を振ってもなかなかうまく入らなかった。」との父の言葉が耳に残っている。

金沢在住の私の小中学校の頃、二人で採集にでかけた思い出に、つきないものがあるが、昆虫を通じての父との心の交流に何かほのぼのとした温いものが感じられる。

父と昆虫は切り離して考えられないので後にも折にふれてのべることにしたい。

蝶の標本



（父が台湾で採取した蝶は250種ぐらいである。図はその一部、右隅下はワモンチョウ、右隅下から２番目は、現在、台湾では絶滅したオオカバマダラ）

父の性格は温厚誠実といえば賞めた言葉になり息子の私がいうのは恐縮であるが，それがぴったりなのだと思われる。われわれ兄弟は父の怒った顔をみたことがなく怒られた記憶もない。

しかし見ず知らずの辺地で開業したり日本の領土となってから10年とたっていない台湾へしかも日露戦争最中に赴任するなど見かけによらない冒険心を持ち合せていたものと思われる。

台湾督府官服姿の父幸奄

3．渡　台

日露戦争最中の渡台

明治37年８月台湾へ渡って以来，大正15年６月内地へ引揚げるまでの22年間を台湾で暮らしたのであるが私は父の台湾時代を二つの時期にわけることができると思う。

台南，花蓮港に勤務した時期，即ち初めて接する熱帯性の疾患に臨床的な関心をもった時期と新竹，台中とウエステルマン肺吸虫，（宮崎博士のいうベルツ肺吸虫，同博士は最近の研究で従来のウエステルマン肺吸虫をベルツ肺吸虫とウエステルマン肺吸虫に二分された。）と肥大吸虫の研究に全力を注いだ時期がそれである。

最初の任地台南では台湾総督府台南医院に勤務し当時流行していた台湾赤痢と呼ばれたアメーバー赤痢の研究に手を染め二，三の報告を出している。前にも述べたように台南に渡った当初は日露戦争の最中で，特にバルチック艦隊がウラジオストック回港の途路台湾へ侵攻するという情報が流れ，防備の手薄な現地では非常な衝動を受け日本人男子は総べて軍守備隊とともに防備にあたり，婦人，子供は一ヶ所に集り台湾人の暴動が起ったら自決する覚悟だったということであった。何れにしても物情騒然たる一時期を台南で過した

のである。

花蓮港医院長として

明治42年12月花蓮港医院長として転任，大正元年10月までの約3年間をこの地で勤務することになるが台湾東海岸中央部に位置する花蓮港は，花蓮港庁の中心地とはいえ当時は新開地で山に囲まれた大変辺ぴなところだったらしく云わばアメリカ開拓華やかなりし頃の西部の町に似たところのように私には想像されるが，町の近くの山地にはまだ帰順していない首狩りの風習のある高砂族が住んでおるといった状態だったという。この高砂族が町へ出没できないように隘勇線と呼ぶ電流を通じた鉄条網を張り回らしてあったのだが鉄条網の附近に草が茂るとそのかげにかくれて穴を堀り鉄条網の下をくぐって出撃してくるので絶えず草を刈っておく必要があった。それで台湾人や帰順した高砂族に草を刈らせていたのである。ところがこの草刈りの労務者が山上の高砂族から狙撃され銃声が聞えると時を移さず病院に電話がかかり負傷者が運ばれてくるといったことがしばしばあったという。また花蓮港の港は波が荒いため接岸できずはしけを利用しなければならなかったが海が荒れた時は人の上陸も荷物の陸上げもできない有様であった。特に発電用のガソリンが陸上げできなくなると例の鉄条網に電流が通じなくなるわけである。発電所で発電しているときは大きな音が町中に聞えており，その音がと絶えた時の不安は云いしれぬものがあったという。

マラリア、黒水熱、そしてキニーネ

このような環境の中で家族が生活し父は診療に従事していたのだが特にこの地方はマラリアが多く，台湾でも東海岸に限られて存在する黒水熱（急激な溶血現象により血色素尿が現れ醤油のような黒い尿がでるのでこの名がある。）がみられ父はこれに関する研究報告

一般診療の間隙を縫って肺吸虫研究にとりくんだ新竹医院

を出している。余談ではあるが大平洋戦争中私が軍政要員として陸軍省から北ボルネオへ派遣された際「黒水熱の原因についてはキニーネ中毒説が認められているが必ずマラリアに続発しているので真の原因はマラリアにある。だからマラリア治療が黒水熱の治療の基本である。マラリアの治療薬としてキニーネしか手に入らないときはキニーネを少量から投与して次第に増量して治療したらよい。」と教えてくれたことをボルネオで特効薬のアテブリンもプラスモキンも手に入らない時にキニーネを用いこれを実行して重症の黒水熱を治癒させた経験がある。このほか父の助言が役立ったことも再三であった。ボルネオへ出発するときも軍のことだから不自由はないだろうが持っていけば安心だからと，塩酸キニーネや当時アメーバー赤痢の特効薬とされていた塩酸エメチンの注射薬をたくさん持たせてくれ戦争末期に多くの患者を救うことができた。

花蓮港時代には蝶の採集にも熱中していたようで危険も忘れて隘勇線間近に蝶を追い回したり毒蛇のひそむ昼なお暗い森林の中を徘徊したこともあったと父の手記に見えている。父は若い時は体が丈夫でなかったが蝶をとりに出かけるようになってからは見違える程健康になったと母から聞いていたが父にとって蝶の採集は一つの健康法でもあり気分転換の

手段でもあったと思われる。

4．肺吸虫研究

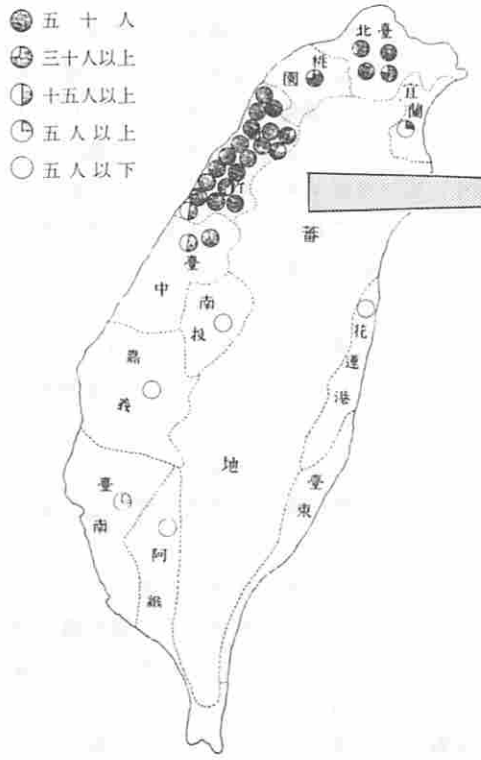
肺吸虫流行地、新竹医院長に就任

大正元年新竹医院に転任して以来大正７年６月に至る５年８ヶ月を新竹で勤務することになるが新竹庁（後に州）は台湾唯一の肺吸虫流行地で父の手記の言葉を借りれば「肺ヂストマ研究の渦中にまきこまれた。」ということになる。

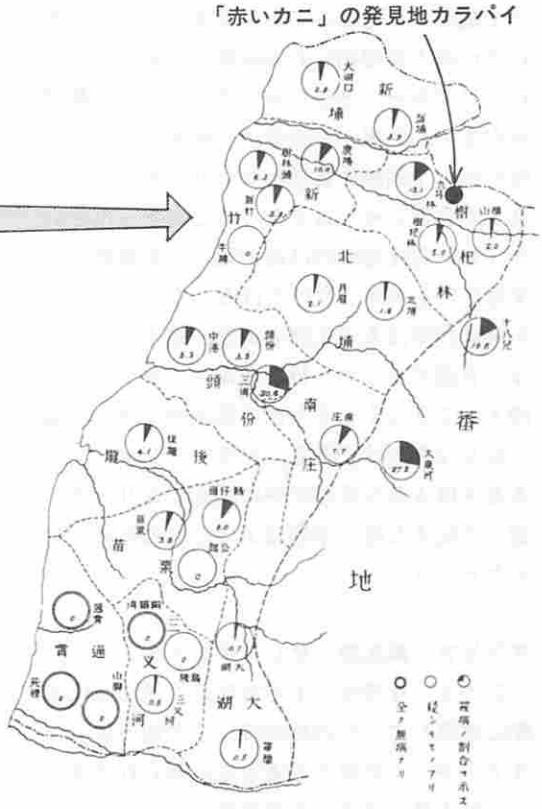
父の手記には「新竹医院長に抜擢されたのは偏えに松尾前医院長の推挙によるものであるが一方私の研究心を買われたものと思われ一層責任の重大なることを痛感し粉骨砕心，身命を賭してこれ（肺吸虫発育史の解明）に当らんとひそかに我が心に誓ったのである」とあるが父の性格からして決して誇張された表現ではなく私には決意の程がうかがわれる。

当時日本の寄生虫学会では明治43年に小林晴治郎博士により肝吸虫の，44年には横川定博士により横川吸虫の，そして大正２年には宮入慶之助，鈴木稔博士により日本住血吸虫のそれぞれ中間寄生が発見されるなど重要な人体寄生虫の発育史の解明が相いつぎ森下博士が百花繚乱の時期と表現された頃である。そして唯一残されていたのは肺吸虫の発育史の解明であった。従って日本内地は勿論，当時日本の領土であった朝鮮，台湾の大学，研究機関が肺吸虫の発育史の究明に鎬を削った時代であった。

父は大学と関係がなく研究の指導者もなく独学で研究に当らねばならず，しかも地方病院なので研究に没頭する時間も設備も予算も



台湾における肺ジストマ病分布図
（臺灣地方病及傳染病調査委員会：肺「ジストマ」病研究報告、大正５年10月31日）



（新竹庁各公学校生徒肺ジストマ病罹病一覧）

ないという無に等しい状況だったので「先輩の驥尾に附して聊かなりとも斯学に貢献することができたら満足するものである。」と手記の中で述べていることも実感として受けとられる。

肺吸虫の第二中間宿主を求めて

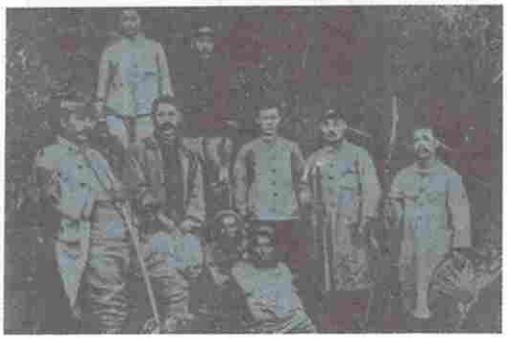
このようなことから新竹に着任後直に肺吸虫の研究にとりかかった。診療に忙殺される日常のなかで肺吸虫症の症状や原因関係などについて詳細な調査を始めた。一方附近の川や池沼をあさり種々の貝類を集め肺吸虫の中間寄生の解明につとめた。そしてこれらの貝類に宿る17種類のセルカリア(有尾幼虫)を発見したがセルカリアの検索で目的を達することは困難であることを悟り第二中間宿主の検索に方向を転換した。唯肺吸虫の卵を培養してできたミラシジウム(線毛幼虫)がカワニナ(河貝子)に侵入することを確めたがカワニナを長く飼育することが困難であったためその後の発育を追求することができなかったのは残念であったと述べている。後に父を含めた多くの日本の研究者によってカワニナが肺吸虫の第一中間宿生であることが決定されたのである。

第二中間宿生探索のため魚類，両生類，水生昆虫などおよそ目にとまるものはすべて検索し肺吸虫の被嚢幼虫を求めたがその努力はむくいられなかった。

このように父は各種生物を調べ中間宿生を探す一方，肺吸虫の流行状況を調査している。大正２年６月から同３年12月まで新竹庁下27公学校（台湾人小学校）学童6322人の喀痰検査を行い268名(4.3%)に虫卵を見出した。更に高砂族児童の調査では42名中９名(21.4%)と高率に感染を認めることができた。父はこの調査は簡単のようであるが容易な業ではなく，これを為しとげることができたのは各学校職員の多大の協力，援助の賜物であるとし，これを人の和の結果とのべている。

奥地山岳の高砂族

高砂族にも肺吸虫患者が存在することは知られていたが，その罹患状況は全く不明であったのでその調査を企てた。幸なことに大正２年未帰順高砂族の大討伐が功を奏して彼等の居住地である奥地山岳地帯への出入が可能となった。父は「天が時を与え給うた」と手記に述べている。しかし討伐は終ったとは云え奥地の調査は多大の危険を伴うものであった。当時蕃界と呼ばれた未帰順高砂族の居住する山岳地帯はすべて要所要所に警察隊が駐屯し電流を通じた鉄条網が張りめぐらされ平地から隔離された別世界であった。警官の護衛があるとは云えそこへ入り込むには相当の覚悟がいったに違いない。こうして大正３年６月から半年にわたりしばしば蕃界を訪れたがパスコアラン監督所のように無防備の粗末な小屋に泊ったときなどは一睡もせず警戒のうちに夜を明かしたという。峻険な急坂を命がけでよじ登らなければ目的地に達せられないところもあったり，その途中銃と蕃刀で武装した屈強な高砂族の一群に出会い，いい知れぬ恐怖にかられたこともあったという。また時折道路わきに高砂族に侵われ首をとられた警察官の墓標が見られたが特に「杏棟山頂上附近では20本程の墓標が林立するのを見て全身に粟粒を生じ戦慄した。」と手記に見えている。また奥地を訪れた翌年には，来年も診療にきてくれと嘆願されたシャカロウ地区の



藩地調査中の父(中列左より２番目)
（中央に座っているのは高砂族、他は警官）

高砂族が反乱をおこし修羅の巻と化したというから父の手記にあるように，奥地調査は千載の一遇であったと感じられる。また宿泊所を眼前にしながら疲労因憊のため昏倒して，3時間も動けなかったこともしばしばであったという。父はこのような苦難を一つの与えられた試練と考えていたようである。

このように苦労して訪れた奥地ではあるが肺吸虫寄生率は意外に低く諸種の条件から研究の適地とはいえないので交通の便も比較的よく肺吸虫患者が住民の55%と最も多いカラパイ地区を研究の根拠地と定めた。そしてこの地こそ第二中間宿主発見の動機となった赤いカニ（ラスバンサワガニ）との出合いがあった父にとって記念すべき舞台となったところである。

カラパイ、赤いカニとの出会い

—大正3年7月—

大正3年7月何度目かのカラパイ訪問で入念に探索を行ったが今回も徒労に終った。絶望の淵から新方面の開拓へと勇気をふるい起していた時のことである。たまたま現地高砂族の水源池を視察しようと思いたちそこを訪れた時のことである。この辺のところを父の手記「肺ヂストマ中間宿生発見のいきさつ」から引用してみよう。

「水源は雑草も繁茂しておらず何一つ生物が棲息しておらぬようでまことに清鮮な湧泉である。然るに偶然か天佑か，たまたま赤い綺麗なカニがどこからともなく匍い出してきて眼前に姿を現したのである。未だかって見たこともない美しいカニであった。神の示現である。その時は唯一匹のカニを見たというに止まり，これにつき何の関心も起らず執着もなくそのまま下山したのである。珠をみつけながら拾わなかったのである。」下山してから夜ねているとあの赤いカニが瞼にうかび，ふとあのカニを調べれば何かわかるのではないかと閃めくと同時になぜ調べなかったのかと後悔の念にかられたと亡くなる数年前頃だったと思うが聞いた覚えがある。

そこで下山してから直ちに新竹市場からカニを買いもとめ検査し330余匹のモクズガニを調べ，たった一匹の鰓にケシ粒程の大きさの包嚢を見つけた。これは後に肺吸虫の包嚢とわかったがその時は判定できなかった。再び珠を取り逃したことになる。モクズガニに寄生率が低かったのは産地が流行地でなかったからで新竹地方の流行地から得られたものであったら問題解決は容易に進展したであろうと後にのべている。

「赤いカニの幻想」

—大正3年9月22日—

モクズガニによい結果が得られなかったので大正3年9月22日再びカラパイ地区へあの美しいカニを求めて訪れた。今度はカニを捕えることが唯一目的だったのですぐさま溪流に飛び込んだ。ところが不思議なことに一匹のカニも見当らない。ここで再び父の手記をみると「茫然自失，足をすべらしたとたんに河底の石がころがり，カニは驚いて隠家から逃げ出し三，三，五，五すなわち数十匹を採取し検査に取りかかった。カニの甲羅を剝いで内臓を鏡検したところ，どのカニも小包嚢の寄生しているのを見て驚いたのである。吸虫類について造詣の浅かった私は，これを包嚢の幼弱なるものと早合点し更に成熟包嚢を探し始めたのである。果然同一カニにおいて大包嚢を発見した。かって新竹市場のモクズガニにたった一つ見たあの怪物と全く同一のものであった。その後カニの内臓，筋肉ばかりでなく鰓にも数個乃至十数個或はそれ以上連珠のような白い玉がたくさん並れでいるのを肉眼でも見ることができた。これが皆大包嚢であった。」と記している。（この小包嚢は後にカラパイ吸虫と呼ばれる別種のものであり父の実験的に得た母虫にもとづき五島博士によりStephanoletitus Parvusとい学名が与

「肺ジストマ」感染経路、研究論文末尾附図
（細菌学雑誌238号 大正４年）

えられた。）

そこで携行してきた２頭の小犬に大包嚢幼虫の多数を食べさしたところ２頭とも同年12月相い前後して死に，剖検の結果その何れにも肺に嚢腫が形成されその中に２個づつ成熟した肺吸虫がいたのである。こうして肺吸虫の中間宿生があの「赤いカニ」ラスバンサワガニであることが証明されたわけである。

ここで「肺二口虫中間宿生発見概報」として大正４年２月発行東京医事新誌1910号及び台湾医学会誌148号に発表となった。そして大正６年医学博士の学位（第1064号）を得ている。

今まで父の手記にもとづいて書いてきたが森下博士はこれについて「赤いカニの幻想」という一文を日本医事新報1764号（昭和33年）に寄稿せられ，そのなかで「まことに厳しい研究の苦心談であるが同時に一篇の興味ある物語として私共の感興をそそる。赤いカニを求めて蕃地に入られた博士の思い出には美しい詩をさえ感じさせるではないか」と述べておられる。

肺吸虫の中間宿生として父が証明したのはラスバンサワガニのほか前記のモクズガニ及びサワガニであるが現在ではその他多数のカニ類が決定されている。日本ではモクズガニが最も重要な感染源となっている。

(1)　(2)

(1) 台湾で彩集されたサワガニ
(2) 肺吸虫メタセルカリアをはじめて大に経口投与させて成虫をえられた犬肺臓
（吉村裕之「中川幸庵の学術遺品の寄贈を受けて」日本医事新報 第2789号より）

父は大正４年短期間ではあるが北里研究所で宮島幹之助先生（後慶大教授）のもとで研究を続けたが，その後も御助言，激励を受けていたことが書翰に残っており先生が亡くなるまで親交が続いたようである。

「夏の蕃山は静かである…。」

父の手記で奥地の状況を記した部分で私には昆虫に関する描写が特に印象的である。ここに引用すると「春になると花も咲き蝶も舞う。一筋の流れのほとりに白百合が咲き乱れモンキアゲハの舞い狂うさまは，さながら一幅の画面である。」「夏の蕃山は静かである。日が西にかたむくと全山数万～十数万のタイワンビグラシが一済に鳴き出し，よい声で合唱するさまは，あたかも天国の音楽を聞くようである。」衛生害虫に関係あるものでは「夕方ラハオ駐在所へ泊ったとき蛇螫（ぼうせい）の襲来に逢

いとても困った。この蟒蝟は蚊帳の目を楽々と通るほど小さなもので前庭に大篝を二ヶ所に終夜たき続けやっと難をまぬがれた。」佐々学先生も印象的な叙述としてこの部分などを御著書「東亜の熱帯病」のなかに引用されているが何の虫かと？をつけておられる。

5．台中から内地へ

肥大吸虫の中間宿主，ヒラマキ貝の発見

大正７年６月に台中医院長に転じて退官までの８年間を台中で過すことになるが，この間大正９年に肥大吸虫の中間宿生がヒラマキガイであることを発見しその発育史を明かにしている。肥大吸虫は台湾，中国，東南アジア，インドなどに広く分布する寄生虫であるが，台湾では人体寄生は稀で豚に寄生がみられるがこれも少く研究材料を集めるのに苦労し中間宿生を発見するのに５年余りもかかったと論文の中でのべている。

そして、論文の最後に「この研究成績は是迄全く暗黒なりし本虫の発育史を闡明にし、本虫の感染経路を探知したるものなれば、今後適切なる予防法を講じ本病の撲滅を可能ならしめ得べしと信ず」と結んでいる。

ヒラマキガイから出たセルカリアは水草に付着し包嚢幼虫となり水草を食べた動物に寄生するが，中国や南アジアでは菱（ひし）の実を食べる習慣があるので人体感染が多いという。

ところで父がヒラマキガイを見つけたのは既に新竹時代で，たまたま内地から寄生虫学の大家石川県大聖寺御出身の桂田富士郎博士が新竹にこられ肺吸虫の調査をされたとき，父はそのお手伝いをしており川へ入り，貝類を採集し博士に差し出していたということであるが，このとき今まで見たこともない一種の貝をみつけたのであった。これがヒラマキガイの一種だったのである。その後２種のヒラマキガイをみつけ都合３種のうち２種のヒラマキガイが中間宿生であることが判明した。父の手記にも桂田博士がはるばる内地から調査にこられたことが刺激になり発奮したとあるが，このときみつけたこの貝の印象が何か後の肥大吸虫の研究に関連があったようである。

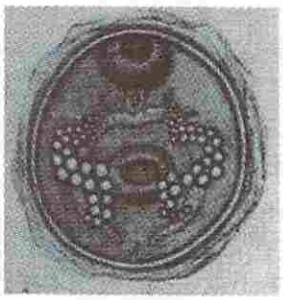
「紅涙記」

大正15年退官，内地へ帰ることになるが，内地へ引揚げる直接の動機は長女登代子の死であったようである。姉は大正14年１月死去しているが，台北第一女学校を卒業してから１年足らずで肝炎で亡くなっている。これまでに次男が１才未満で死亡，次女は５才余りで台中で世を去り，続いて長男が19才で金沢の病院で死亡しており２男２女を失っている。このように台湾で次々と子供を亡くしたので遂に引き揚げを決意したと母から聞いている。

父に関する資料を探していたら，次女登茂子の死を痛む「紅涙記」という「我が最愛の登茂子は６才を一期として盆の月の10日の朝忽然としてみまかりぬ」という書き出しの手記がでてきたが，子を思う親の真情に接し肉親としては涙なくして読むことはできなかった。病気は疫痢であったが父は病用で帰宅がおくれ手おくれになったものであった。このように父は母もそうであったが大変子ぼんのうの一面があった。

故郷での診療活動

内地では亡き母の郷里金沢に住み金城病院に13年間つとめ，続いて自宅開業をしていた。



肥大吸虫メタセルカリア

この間昭和15年5月に母が亡くなっている。戦後は生家福光町からそれ程離れていない油田村（現砺波市）の診療所に勤め8年間診療に従事した。

昭和30年80才で診療所を退職するまで60年間医療に従事していたわけであるが臨床家としての父は常に患者の病状を案じ家にいるときでも心にかけていることがはたの目にもよくわかった。油田にいた頃は高齢にも関らず田舎のことなので徒歩で遠くまで住診に出かけることも日常のことで急患があれば深夜もいとわなかった。

余生を金沢の自宅で送りたいと望んでいたが借家人がでてくれないので遂に自宅裏の敷地内に小宅を建て最後はそこで住むことになった。そしてここで昭和34年10月31日に85才の生涯を閉じたのである。

森下薫博士はじめ、諸先生の御厚情

死の直前に亀谷了博士の創設された目黒寄生虫館に最初の実験に使用した肺吸虫の寄生した犬の肺，中間宿生であるカニ6種及び肥大吸虫の標本を寄贈，保管いただくことになった。11月8日亀谷先生が受領にきて下さることになりその折声を録音したいとのことであったが間に合わず先生も残念がっておられた。この辺のことは，亀谷先生の「中川幸庵博士の御逝去悼む遺言により寄贈を受けた貴重なる標本3点について」（東京医事新誌76巻12号）に詳しい。

この年の9月保健文化賞受賞が決まり特に天皇陛下の拝えつがあるということで父は出席を強く望んでいたが病状これを許さず昨年亡くなった，兄が代って出席した次第である。

父は園芸にも興味を持ちバラやぼたん，椿，東洋蘭などにもこっていた。85才の長寿を保ったが昆虫採集や園芸など自然に親しむことが健康法の一つであったと思われる。健康には常に留意し晩年には高齢者には最も危険な肺炎の予防には特に気をつけ，私たちの家を訪れる時は前もって家族に風邪をひいているものがいないか問い合せ，いないことを確認してからやってくるという慎重さであった。

父は酒も煙草ものまずまじめ一方の人間で公私の別も厳しく台湾時代には，台湾人の富豪から多額の謝礼があったようだが，すべて日本赤十字社や済生会に寄付し赤十字社からは有功賞が送られている。

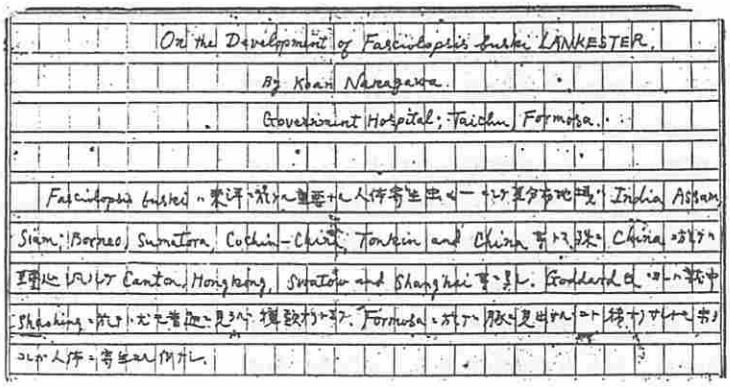
父の終生忘れられない感激の一つに大正5年の台湾医学会の総会に北里柴三郎先生の特別講演があり，そのなかで父の肺吸虫中間宿発見について激賞され讃辞を賜ったことであった。父の手記の中で「満堂の聴衆のなか身に余る光栄で恐懼，感激，感涙にむせびました」とある。

佐々学先生が御著書「アジアの疾病」肺吸虫の項に，父の事績を「目と足で自然から学びとった成果」としておられ「学問とは大学や研究所の専有物ではなくて，こと自然科学に関する限り自然がその真理を人間に教えてくれるものであること，そして人間は自然の扉をたたくことによってはじめて沈黙を破ってくれることを訓えられる。その見事な例を中川幸庵が示してくれたともいえよう。」と結んでおられる。まことに有難いお言葉である。

学術書以外でも，古くは宮島先生の「動物と人生」のなかに，また森下先生の「ある医学史の周辺」亀谷先生の「寄生虫神士録」吉村先生の「寄生虫からの警告」「病原体を追った人びと」に父の事績をのべられており遺族として感謝に絶えない。

父は長年もくもくと診療に従事し，世に知られない存在であったが，森下先生の御尽力により晩年に雑誌「予防医学」に手記を発表したり，特に桂田賞，保健文化賞受賞の栄に浴したりすることになった次第である。またこれも先生のお計らいで日本寄生虫学会名誉会員に列せられ昭和31年4月日本寄生虫学会25周年記念にあたって「肺吸虫研究の思い出」という記念講演を行っている。

保健文化賞受賞に際して与えられたレリーフ



On the Development of Fasciolopsis buski LANKESTER.

By Kiyoshi Nakagawa.

Government Hospital, Taichu, Formosa.

父の直筆原稿（Jour.Parasit., VIII, No.4, 1922 への投稿の草稿と思われる）

予防医学に発表した「肺ヂストマ中間宿生発見のいきさつ」の原稿を父から見せられたとき私は初めてあの赤いカニのエピソードを知った。その後東京医事新誌の「肺ヂストマと肥大吸虫研究の半面」で私たちの知らない研究に関する幾多の苦心，迂曲波瀾を知った。

故森下先生の御尽力がなければ，父の晩年は甚だ淋しいものであったであろう。ここに改めて故森下先生はじめ諸先生の御厚情を謝し筆をおくことにする。

参　考　資　料

1）　中川幸庵：肺二口蟲虫間宿主発見概報，細菌学雑誌，133，39－42，大正４年２月７日

2）　臺灣地方病及傳染病調査委員会：肺「ジストマ」病研究報告，大正５年10月31日

3）　中川幸庵：肥大吸虫　Fasciolopis buski の発育に関する研究，特に其中間宿主及「セルカリア」の決定について（概報），東京医事新新誌第2191号，大正９年８月

4）　中川幸庵：肺ジストマ中間宿主発見のいきさつ，予防医学，第２号，昭和25年５月

5）　中川幸庵：肺吸虫と肥大吸虫の研究の半面（附カラパイ吸虫と老濃吸虫），東京医事新誌，75巻第１号，昭和33年１月

6）　亀谷了：保建文化賞受賞　寄生虫学会の大先輩　中川幸庵博士の横顔，厚生，昭和23年８月13日

7）　亀谷了：中川幸庵博士の御逝去を悼む　遺言により寄贈をうけた貴重なる標本三点について，東京医事新誌，76(12)，昭和34年12月

8）　亀谷了：中川幸庵博士の画かれたカラパイ蕃社の地図，東京医事新誌，第77巻10号，昭和35年10月

9）森下薫：赤い蟹の幼想　－中川幸庵博士のことども－，　日本醫事新報，1764号，昭和33年２月

10）　森下薫：ある医学史の周辺－風土病を追う人と事蹟の発掘－，肺吸虫の秘密をあばく蟹の幸庵中川博士，日本新薬株式会社，57－74，昭和47年４月

11）　森下薫：中川幸庵博士の偉業の地を訪ねて台湾のカラパイ渓に石を拾う、予防医学オオサカ，15号，昭和52年

12）　吉村裕之：中川幸庵博士の学術遺品の寄贈を受けて（グラフとも），日本醫時新報，No.2787，昭和52年９月24日

13）　吉村裕之：寄生虫からの警告，家の光協会，昭和56年２月

14）　吉村裕之：病原体を追った人びと　－その栄光と残照－，北国出版社，昭和63年５月

15）　佐々学編：アジアの疾病，（佐々学：肺吸虫，肥大吸虫病），新宿書房，昭和53年９月